

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第635号 平成25年10月30日

平成の大遷宮

10月は、「神無月」と呼ばれています。

「神無月」の語源には諸説あるようですが、世上、1年の事を話し合うため全国から神様が出雲に集まり、他の地域からは神様が居なくなる為と伝えられています。これは、中世以降、出雲大社の御師が全国に広めた俗説とされていますが、しかし、全国から神様が集まり、額を寄せて色々と相談しているという姿を想像すると、神様達には申し訳ありませんが、ちょっとユーモラスで面白いなと思います。

いずれにせよ、全国から神様が集まっているならさぞかし靈験あらたかに違いないという訳で、先日島根・鳥取への出張に併せて出雲大社に参詣し、家内安全、商売繁盛等々沢山の願い事をして来ました。しかし札幌に戻って以来、幾ら全国から神様が集まっているとはいえ、いささか凶々しかったかなと反省しているところです。

ところで、出雲大社というのは大国主様をお祭りしていますが、大社創建のいわれについて古事記は、「出雲の国譲り」の中で次の様に書き残しています。

この葦原(あしはら)中国(なかつくに)は命令に従って差し上げることにいたしまししょう。ただ、天つ(あまつ)神(かみ)御子(みこ)が天津日継(皇位)をお受けになる、光り輝く宮殿のように、地盤に届くほどに宮柱を深く掘り立て、高天原に届くほどに干木を高く立てた、壮大な宮殿に私が住み、祭られることをお許ください。それが許されるのであれば、私は多くのまがり込んだ道を経ていく片隅の国(出雲国)に隠れて留まることにいたしまししょう。」

(竹田恒泰著「現代語古事記」から)

その昔、社殿は高さが48メートルもあったそうです。ちょっと信じがたい高さですが、その社殿は、古事記が「高天原に届かんばかりに干木を立てた」と表現している様に、誠に壮大なものだったに違いありません。

なお、平成12年に巨大な御柱の痕跡が発見され、それによって社殿の高さは48メートルあった事が確認されていますが、現在の社殿は、1744年(延享元年)に造営されたもので、その高さは24メートルと当時の半分しかありません。それでも、その荘厳さを見る人を圧倒しています。

出雲大社は、今年60年に1回の「平成大遷宮」の年に当たっており、その事は皆さんもご承知だと思います。「遷宮」というのは、神社の本殿を造営する、又は修

理する際、ご神体を別の本殿に移す事をいい、伊勢神宮の「式年遷宮」はその代表といえるでしょう。

伊勢神宮の「式年遷宮」は、20年ごとに社殿を建て替え、祭神を旧社殿から新社殿にお遷しするという壮大なもので、本年10月に62回目の「式年遷宮」が行われています。

一方、出雲大社の「平成大遷宮」は、伊勢神宮の場合とは異なり、ご本殿そのものは建て替えず、大屋根の葺き替えや修理を行うだけです。この為、ちょっと見たところでは何処が変わったのかと感じさせますが、ご本殿の屋根を見ると明らかに新しく葺き替えられており、研ぎ澄まされた美しさを感じさせます。

現在のご本殿は、先程も述べた様に1744年に造営されたもので、以来、1809年（文化6年）、1881年（明治14年）、1953年（昭和28年）とほぼ60年ごとに3度の「遷宮」が行われています。

4度目の「遷宮」となる「平成大遷宮」は、平成20年4月に行われた仮殿遷座祭から約5年間の歳月をかけて行われて来たもので、今年の5月に修造が整い、ご祭神である大国主神様は元の本殿にお還りになりました。

出雲大社に着いたころは雨模様の生憎の天候でしたが、参詣の人々は引きも切らず、60年に一度という貴重な巡り合わせを愛おしむかの様に祈る人々の姿が印象的でした。

伊勢神宮の「式年遷宮」と出雲大社の「平成大遷宮」が重なるという記念すべき年も、間もなく暮れようとしています。まさに慌ただしい1年ではありましたが、出雲大社の荘厳な空気に触れる事が出来て、今年は忘れ難い年となりそうです。

（塾頭：吉田 洋一）